特別講演 Ⅰ

日中医薬文化交流史——博多を窓口として

小曽戸　洋

一、緒　言

『魏志』（二八〇頃）倭人伝に邪馬台国に至るまでの倭の諸国名として、対馬国・一支国・末盧国・伊都国・奴国・不弥国・投馬国の名がある。不弥・投馬・邪馬台がいずれの地かについては諸説粉々・甲論乙駁だが、はじめの五国を対馬・壱岐・末羅（松浦）・伊覩（怡土）・儺に比定することに異論をはさむむきはほとんどない。儺は那であり、奴国は博多の地にほかならない。近郊の志賀島から出土した「漢委奴国玉」の金印は、紀元五七年に後漢の光武帝が倭奴国王に与えた印綬であり（『後漢書』光武帝本紀・東夷伝）、当地が奴国であることを証するものである。

倭人伝には、対馬は千余戸、一支は三千許家、末盧は四千余戸、伊都は千余戸、これに対し、奴国は二万余戸あったという。すなわち博多は日本開闢以来、東アジア即世界に対する比類なき国際都市であり、日本の窓であり、顔であった。この立場は、古代、中世を経て、近世初期の鎖国体制確立まで不動のものであった。

このたびの日本医史学会総会が博多の地で開催されるにあたり、演者は準備委員会より忝くも特別講演の指名を受け、標記のごとき演題を与えられた。前述の歴史を考えるに、博多を窓口とした日中医薬文化交流史を語るということは、

とりもなおさず古来、江戸初期までの日中医薬文化交流を語ることである。なかんずく、江戸初期までの日本の医薬文化（学問）のおおかたを中国のそれに負ってきたことを鑑れば、標題は「江戸初期以前の日中医薬文化交流史」と換言することが可能であり、「博多を窓口として」という副題は蛇足に等しかろう。過去、博多が担ってきた役割はそれほど重いのである。以下、歴史の流れに沿って、事蹟の数々をふり返ってみよう。

二、黎明の時代

わが国にいつ頃、どのような経緯・状況で大陸の医薬文化が到来し、浸透していったか。これは日本史、日本文化の根源そのものにかかわることで、この問に答えることは至難である。ただ縄文文化はさておき、稲作や青銅器・鉄器を基底とする弥生文化は、大陸文化の強い影響のもとに成立したものである。農業・金属器ほか物品製作技術の行われた形跡は、出土品や遺構によって比較的容易に知ることができる。一方、医薬技術の行われた形跡は、少なくとも今日の考古学的手法では解明しにくい。とはいえ、大陸諸文化が伝播する過程で医薬文化のみが例外であったと考えるのはむしろ不自然であり、弥生時代、大陸の医薬技術は多少なりともたらされていたとみるべきであろう。

古墳時代に入り、畿内に大和朝廷が成立し、多くの諸国はその支配下に入った。四世紀後半には朝鮮南端の任那に進出していたという。宗像神社沖津宮（福岡県沖ノ島）の岩上祭祀が行われだしたのもちょうどこの頃である。

六世紀までは、大陸文化の導入は多くは朝鮮半島を介して行われた。生命に直接与る医療は、現実上もっとも身近で逼迫した学術であり、大和朝廷は百済・新羅・高句麗に対し積極的な姿勢で医薬知識の供与を求めた。允恭天皇三年（四四六か）朝廷は新羅に遣使して良医を求め、金武が来朝して天皇の病を療したという。これが外国医師渡来の初出記録である。また雄略天皇朝（五世紀後半）にはもと高句麗人で百済に帰した徳来が朝廷の要請によって来日し、徳来はのちの難波薬師の祖となった。倭の五王の時代である。

継体天皇七年（五一三か）五経博士が来日。以後、百済から易・暦・医薬・礼楽などの専門学者が定期的に派遣されるようになった。同二十一年（五二七か）筑紫の国造磐井が大和政権に反乱を起こしたが（磐井の乱）、翌年鎮圧され、筑紫はますます大和の統制下に入った。宣化天皇元年（五三六か）朝廷は博多湾（那津）を望む地に官家を修造せしめ、諸国の屯倉から集めた穀物を畜え有事に備えた。この那津官家（いまの三宅か）は筑紫館、そして外務官庁兼国際迎賓館ともいうべき鴻臚館へと発展していく。

宣化天皇三年（五三八か）には仏教が伝来。欽明天皇十五年（五五四か）朝廷は百済に医博士の交代派遣と、薬物の送付を要請し、翌年、医博士の王有陵陀、採薬師の潘量豊・丁有陀らが渡来した。当時朝鮮半島の上層階級で行われた医学ないしは医療制度は、三韓各国によって特異性はあるにせよ、その基盤は漢～六朝の中国医学に負っていたと考えられる。

欽明天皇二十三年（五六二か）智聡が医薬書を含む経典類計一六四巻や仏像・楽器を携え、来日した。智聡は呉国主の照淵の孫といい、朝鮮経由の帰化人ではあるが、医薬書はむろん漢籍（中国人による漢文の書）であったに相違ない。これが中国医薬書渡来の公的初記録である。

三、遣唐使の時代

推古天皇十五年（六〇七）聖徳太子は小野妹子を隋に遣わし、ここに日中間公式の交流が始まった（第一回の遣隋使を六〇〇年とみるむきもある）。翌年、妹子は再び隋に渡ったが、このとき倭漢福因が従った。六一八年には隋が滅亡、唐朝が成立した。日中交流はさらに濃密になっていくが、この動きに深く関与した医療関係者に薬師の恵日がいる。恵日は徳来の五世の孫で、中国に渡り、推古天皇三十一年（六二三）福因らと新羅使に随って唐より帰国。唐は法式備定の珍国であるから常に通うべきことを上奏した。舒明天皇二年（六三〇）恵日は犬上御田鍬とともに第一回の遣唐使に任ぜられ、

再入唐した。同十二年（六四〇）には高向玄理・南淵請安らが帰朝し、日本における律令制度化への準備を大きく推進した。六四五年の大化改新を経て、白雉二年（六五一）恵日は三度目の入唐を果たし、子孫は難波薬師のち難波連として奈良時代に医界を中心に活躍した。

大化改新で実権を得た中大兄皇子（天智天皇）は斉明天皇七年（六六一）斉明女帝以下朝廷の人々とともに那大津（博多）に入り、宮をおいた。先年亡んだ百済を救援復興すべく、唐・新羅連合軍と戦うためである。斉明女帝は同年この地で薨じ、翌々天智天皇二年（六六三）日本軍二万七千は白村江における決戦で惨敗を喫し、撤退した。百済滅亡にともない日本に亡命した百済人は少なくなく、彼らは日本の文化向上に寄与した。そのうちの一人、鬼室集信は薬物学の知識にも長けていた。

白村江の敗戦は、唐軍の日本進攻を予想させた。朝廷は翌年筑紫の大宰府近くに水城を築き、以後各地に山城を造り、防衛体制を固めていった。西海道の総督府であり、外務政庁であった大宰府はこの時点で確立した。

遣唐使は承和五年（八三八）まで一六回派遣された。はじめは二隻、のち四隻の使船はいずれも難波津（大阪湾）から瀬戸内海を通って大津浦（博多湾）に入り、天候をまって出航した。当初は壱岐―対馬―朝鮮半島西岸―山東半島の北路であったが、新羅との国交断絶後は九州南端―南西諸島―東シナ海―揚子江の南路が採用された。しかしいずれにせよ、難破・漂流の危険度は想像を絶するほど高かった。

大宝元年（七〇一）鎌足の子・不比等を中心に進められた大宝律令の撰定が完成した。初期遣唐使将来の資料を模範に国家整備すべく作られた律令である。令は以前にも近江令、浄御原令があったというが、詳細不明。養老二年（七一八）には大宝律令に若干の修正を加えた養老律令が成った。そのうちには医事制度を定めた医疾令がある。

当時日本の中央医事官庁は、中務省に内薬司と、宮内省に典薬寮が置かれた。医学教育は中央では典薬寮における大学、地方では国学において行われた。地方では大宰府学がもっとも大規模で、医師（正八位上）二人が置かれ、筑豊肥か

ら医生が参集し、秀才者には居住地が下賜された。現在、大宰府跡からは医薬関係の記事のある木簡も出土している。なお大宰府の出先機関であった鴻臚館跡（平和台球場）の考古学的発掘も近年行われ、医科学的研究も試みられている。

医疾令に指定された医学教科書は、中国の唐令（六五一年の永徽令）に全く準じたものであった。すなわち医生には『甲乙経』『脈経』『本草（本草経集注）』『小品方』『集験方』、針生には『素問』『黄帝針経』『明堂』『脈決』『流注図』『偃側図』『赤烏神針経』などが課せられた。仕官にはその試験に合格せねばならなかった。

大宝律令完成の翌年（七〇二）大津浦を出航した粟田真人らの遣唐使団には万葉歌人・山上憶良の姿もあった。慶雲四年（七〇七）頃帰国。神亀三年（七二六）頃筑前守として大宰府に下り、翌々年大宰帥として赴任した大伴旅人と知り合い、天平二年（七三〇）大宰府の旅人宅で開かれた梅花の宴には憶良も招かれ、歌を唱和した。憶良は病苦を主題とした作品が多く、帰京後同五年（七三三）に著した「沈痾自哀文」からは憶良の中国医学に関する知識のほどがうかがえる。ちなみにさきの粟田真人は則天武后の宴で唐人に容姿温雅な文人と評されたことで有名だが、その後裔と思われる粟田道麻呂も入唐したらしく、天平宝字三年（七五九）内薬佑となった（七六七年左遷され幽閉死）。

和銅三年（七一〇）平城京へ遷都し、奈良時代となったが、この頃、本草学の分野では唐の勅撰本草である『新修本草』（六五九成）が伝えられ、新知識が加わった（七三一年以前将来）。同書はやがて従来の『本草経集注』にとってかわる。

天平七年（七三五）と同九年には都で疱瘡が猛威を奮った。とくに後者は激烈で、「春、疫瘡大発す。初め筑紫より来り、夏を経て秋に渉り、公卿以下、天下百姓相継いで疫死す」というありさまだった。病源体は舶来性のものであろう。国際港は医薬文化の受け口であると同時に、皮肉にも病源体の受け口ともなったのである。

天平勝宝六年（七五四）には鑑真一行が艱難辛苦を越えて来航。鑑真らは遣唐第二船で薩摩に着いたが、第一船は安南に漂着。第一船に乗っていた大使藤原清河や阿部仲麻呂らは二度と日本の土を踏めなかった。鑑真は医薬に通じ、数々の薬物をもたらしたらしいが（第二次渡航時には薬物として麝香・沈香・甲香・甘松香・竜脳香・胆唐香・安息香・棧香・零陵

香・青木香・薫陸香・畢鉢・呵梨勒・胡椒・阿魏・石蜜・蔗糖・蜂蜜・甘蔗を舶載したが、海のもくずと消えた。『鑑真和上東征伝』)、唐の楊上善編注の『黄帝内経太素』や『黄帝内経明堂』もこの時点で将来された可能性が高い。楊上善の編注は格段に勝れており、『太素』は三年後に出された勅令で医生の最重要テキストに新採用され、宋林億注本が来るまで『黄帝内経』の第一テキストとして命脈を保った。

医薬知識に精通し、当時日中間を往来して文化交流に貢献した人物として羽栗翼(たすく)の名も忘れることはできない。翼は阿倍仲麻呂の従者として渡唐した羽栗吉麻呂と、唐の女性との間に中国で生まれた。十六歳の天平六年(七三四)父と弟翔(かける)とともに来朝。宝亀六年(七七五)遣唐録事となり、翌々年入唐。弟翔は天平宝字三年(七五九)の遣唐船で兄よりさきに入唐しており、再び日本へは戻らなかった。翼は入唐の際、不明の鉱物を携行し揚州の職人に鑑定させている。宝亀九年(七七八)帰朝。天応元年(七八一)には難波で朴消の製造を行い、延暦五年(七八六)には内薬司正兼侍医となり、皇室の医療を担当した。八世紀にはこのような人物もいたのである。

医薬書や人材とともに、薬材も盛んに舶載された。従来、薬材の国内供給をはかるため、諸国に本草の同定品や類似品の供出が求められてはいたが、なお舶来品に代えがたい薬物は多く、治療薬・香薬等の輸入品に占める割合は大きかった。その遺品に正倉院薬物や法隆寺伝来薬物がある。これらのうちには中国のみならず、南海や西域産と推定されるものも少なからず含まれており、当時の薬物流通の国際的スケールの大きさを物語っている。

延暦十三年(七九四)都は平安京に遷り、平安時代に入った。中国との正式交流が始まってすでに二百年近くを経、自国文化確立への意欲も深まり、他の分野と同様、斯界では従来の渡来中国医書を参考に、日本人による医薬書の編纂が行われるようになった。これが平安時代の医学の特徴の一つといえる。

大同三年(八〇八)出雲広貞は安倍真直らとともに『大同類聚方』百巻を勅撰したが、失伝。広貞は『難経』の注解書『難経開委』も著し、あるいは天平宝字五年(七六一)帰国の遣唐使の情報に基づき、薬方の度量衡を新訂したりもして

いる。菅原岑嗣の『金蘭方』五十巻、小野蔵根の『集注太素』三十巻も失伝した。

延暦二十三年（八〇四）難波津・大津浦・松浦郡田浦を経て渡海した空海は、大同元年（八〇六）には帰国して大宰府の地にあった。空海もまた医に通じていた。『続日本後紀』承和元年（八三四）十二月十九日条に引用される空海の上奏文には『太素』や『本草』の書名が見え、あるいは『高野雑筆集』に「薑豉湯を服さば除郤（のぞ）くことを得む。因って馳せて母薑・豉・呵梨勒等の薬を送る」などとある。

遣唐使は承和五年（八三八）を最後に中断した。そして寛平六年（八九四）遣唐大使に任命された菅原道真はその停止を進言し、承認されて、遣唐使の時代は終った。道真は昇進を重ね右大臣となったが、延喜元年（九〇一）突如として大宰権帥に左遷され筑紫に下り、同三年（九〇三）大宰府で非運の最期を遂げた。墓地は安楽寺となり、同十五年（九一五）大宰府天満宮が造営された。

遣唐使廃止の理由の一つは、あえて厖大な費用を用い危険を犯して陰りのさした中国から学ぶ価値が薄れたことにある。事実すでに唐の主だった医書のほとんどは輸入されていた。それを示す史料に藤原佐世の『日本国見在書目録』がある。同書の医方家の部には一六六部一三〇九巻に及ぶ医薬書が登載されており、従来の遣唐使が意欲的にもたらした書目の子細を知ることができる。

延喜十八年（九一八）頃には深根輔仁が『本草和名』を、また承年（九三一～七）初年頃には源順が『和名類聚抄』を編んだ。そこでは中国医薬書を用い、医薬用漢語を国語に比定し、実用化するためのひたむきな作業がなされている。しかしなんといっても遣唐使将来の医薬書が育み咲かせた最大の精華は、丹波康頼の『医心方』三十巻である。康頼は帰化中国人の子孫としての自負もあり、日本人としての自覚もあった。『医心方』にはその両面が見える。日宋時代が来るまで、質でも量でもこの書を一歩たりとも凌ぐ書は現われなかった。

四、日宋の時代

十世紀初、唐王朝が滅亡し、九六〇年に至り、宋王朝が成立した。九世紀以降低迷に陥った医学文化も、ここに至って再び開花し、新たな進展をみる。そしてそれは日本の医学文化に新風を吹き込むこととなった。

宋の文化を語るとき、以前のそれと条件を画して考えなければならないのは、印刷本の出現と流布である。北宋代には木版印刷技術が飛躍的な発達を遂げた。北宋に至るまでは医薬書はすべて手写によって伝承された。ところが宋朝に入ると皇帝や政府高官らが医療政策を重視したこともあって医薬書が初めて印刷物となり、多種多量の医書が出版物として世に出回ることとなった。これは医学知識の普及という面において革命的なことであった。医書が普及すれば知識水準は高まる。それは必然的にいっそうの発展を促した。

北宋を代表する医書には『太平聖恵方』百巻（九九二）、『聖済総録』二百巻（一一一一～八）、『太平恵民和剤局方』五巻のち十巻（一一〇七～一〇）などがある。ことに『和剤局方』は以後の中国・日本の医学（薬物処方）にきわめて強い影響を与え、現在にも及んでいる。本草書は従来の『新修本草』を核に大幅な増補が加えられ、何度にもわたって改訂版が編纂された。『証類本草』（一〇九〇年代）はその代表である。

さらに特筆すべきは古典医書の校訂出版である。一〇二七年には国子監において『素問』『難経』『諸病源候論』が校刊された。最も充実した時期は一〇六五～九年で、校正医書局において林億らの儒官が綿密な作業のもとに『傷寒論』『金匱玉函経』『金匱要略』『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『脈経』『素問』『甲乙経』をたて続けに校刊した。当時失われていた古典の捜索命令も国内外に発せられ、『針経（霊枢）』は高麗から写本が献上され、ただちに校刊に付された。これでおおかたの医学典範が出版物として出揃うことになり、その後も版を重ねること南宋に及び、これを背景に医学古典の研究も格段に進んだ。

宋王朝はその後半、西北から侵入した異民族の金や蒙古に追われて中国南半分に撤退し、南宋代（一一二七～一二七九）となったが、この時代にも医書の編刊あるいは覆刊は相次いだ。

日本においては遣唐使停止後、延喜年間（九一〇～二三）には貿易制限政策がとられたが、宋朝樹立後、宋は財政上、対外貿易振興を推進し、日本へは福建ついで浙江などの宋商人が頻繁に来航するようになった。日本の窓口はやはり博多で、鴻臚館で宋商人の接遇が行われ、大宰府庁がこれを管轄した。日本側も十一世紀後半に入って対外貿易に積極的になり、当初は高麗を対象としたが、十二世紀後半になると直接南宋との交易が本格的に開けた。日宋貿易と称されるものがこれで、日本と中国の商船が、それぞれ博多港と浙江明州の寧波港を往来した。

当時日本の支配者は平清盛であった。清盛は弟の頼盛を大宰府に派遣して府庁機構を統轄した。門司関は西海路の要点であり、商船は瀬戸内海を通って大輪田泊（兵庫）まで行きかうようになり、対宋貿易は活況を呈し、平氏は財と文化を収めた。日本人が印刷化された典籍を目にしたのはこれが初めてのことで、摺本と称された宋刊本は中国の最新文化知識の象徴として珍重され、学界に衝撃を与えた。藤原頼長は康治二年（一一四三）に医薬記事を含む類書『太平御覧』一千巻を入手し、読み進めているが、宋版医薬書渡来の確実な記録は、藤原通憲の『通憲入道蔵書目録』（一一五九以前）の『大観本草』（一一〇八）の著録が初見であろう。

建久三年（一一九二）源頼朝が鎌倉に幕府を開いてからは次々と宋版医薬書が輸入されるようになった。当の中国では宋刊本の出現によって刊本（もしくはそれに基づく写本）が主体となり、旧巻子本はたちまち姿を消したが、日本ではかつての遣唐使将来品に由来する古巻子本系の医書と、新渡来の宋元版系の医書が、半ば併存して行われた。従来多大な犠牲を払って憧れの唐から得、学んできた医学典籍は容易に捨てがたい重みがあり、一方、宋からの新版も依然として手軽で廉価なものではなかった。旧来の唐医学と新渡来の宋元医学の共存、これが鎌倉～南北朝の日本医学の最大の特徴といえる。

平安末期の『長生療養方』（一一八四）にはすでに『証類（大観）本草』の影響がみられる。源氏・北条の武士の時代には武家文化の独自性が目立つが、これは宋文物の強い影響を受けたものである。医学の新しい担い手は従来の貴族社会の宮廷医から、最新の漢学を受容した学僧、とりわけ高度な医学知識に長けた僧医へと移行していった。鎌倉から室町時代における中国医学の受容は、禅僧の活躍なしに語ることはできない。儒学は江戸初期、藤原惺窩によって禅宗から解放されたといわれるが、これは医学に関しても同じで、曲直瀬道三の時代まで続いた。

永観二年（九八四）奝然が北宋に渡ったのを皮切りに、成尋・道元をはじめ数多くの禅僧が入宋し、宋文化を持帰った。茶は最澄が初めて日本に将来したとされるが、明庵栄西に至っては『喫茶養生記』（一二一一）を著し、前代までの丹薬思想に代わる新しい仙薬としての茶と桑の効用を説いた。同書に引用される典籍は『太平御覧』に依拠するところが大である。

名僧、円爾弁円は博多と縁が深い。博多の円覚寺ついで謝国明の邸宅に寓居して渡宋船を待った円爾は、嘉禎元年（一二三五）船便を得て博多港を出、中国の高僧に法を学んだ。仁治二年（一二四一）帰国の際には多数の書籍を携来したが、このうちには宋版医書が少なからず含まれていた（『普門院蔵書目録』）。宮内庁書陵部所蔵の『魏氏家蔵方』はその一つである。また『太平御覧』など大部の書もあり、現在中国から出版され世上に流布する『太平御覧』の底本（東福寺所蔵）も円爾将来品である。帰国した円爾は、大宰府に崇福寺、肥前に万寿寺、博多に承天寺を開いたのち、京・鎌倉で尊崇を集めた。

伝来経緯は明らかでないが、金沢文庫伝来の宋版医書『諸病源候論』『備急千金要方』『外台秘要方』『太平聖恵方』『楊氏家蔵方』『図註本草』なども禅僧の往来あるいは日宋貿易によって舶載されたものに相違ない。

宋からの輸入品は薬物に関しては香薬類や鉱物薬が中心であった。このうち内服治療用のものはさほど多くはないであろう。一方、日本からは水銀・鹿茸・茯苓・真珠・硫黄・螺頭ほかが輸出された。

文永の役（一二七四）・弘安の役（一二八一）と二度にわたる元寇は日本を混乱と恐怖に落とし入れた。いうまでもなく博多は開闢以来の被災地となり、福岡の箱崎を中心に、博多の町は焼土と化した。両役の間、一二七九年に南宋は滅亡し、蒙古は元となり、三百年にわたる日宋関係は終わった。

宋の滅亡直後に著された惟宗具俊の『本草色葉抄』（一二八四）、惟宗時俊の『医家千字文註』（一二九三）、同じく時俊の『続添要穴集』（一二九九）などの書は、唐鈔巻子本に由来する書を基本としつつも、何種類にも及ぶ宋刊医書からの引用形跡が認められる。宋版医薬書の渡来は従来相伝の医書の改訂を迫った。これら惟宗氏の書はこの時期、医学典範が旧鈔巻子本から新渡来宋刊本に転換したことを如実に示すものである。なお、惟宗氏は対馬宗氏の一族とみるむきもあるが、不詳。

鎌倉時代最大の医学全書である梶原性全の『頓医抄』五十巻（一三〇二～四）と『万安方』六十二巻（一三一三～二七）もまた拠るところの資料は旧鈔巻子本系と新渡来宋刊本系の混交であるが、もはや後者の影響のほうが圧倒的に強い。『頓医抄』の中心的資料となった『太平聖恵方』は南宋紹興十七年（一一四七）福建刊本が使われたらしい。また『万安方』の中心的資料となった『聖済総録』は元大徳四年（一三〇〇）刊本が使われている。さらに注目すべきは『万安方』における『風科集験名方』の引用である。『風科集験名方』は大徳十年（一三〇六）に版行された医書で、『万安方』が引用する唯一の元の著作である。刊行後わずか数年にして日本の医書に引用された事実は、南宋が亡んだのちも、引き続き元との交易が頻繁に行われていたことを物語るものである。

ついで、南北朝時代を代表する医書に『福田方』十二巻（一三六三頃）がある。著者の有隣もまた京都南禅寺に住した禅僧であり、同書には漢より元に至る約一六〇種の文献が引用してあるが、過半は新渡来の宋元版に由来する医薬書である。最新医書では元の至正三年（一三四三）刊の『世医得効方』を引用しており、この時代も元からの新たな医書の輸入が続いたことを示している。

禅宗は学問・芸術を包含し、宋元文化の機軸そのものであった。日本の渡海僧と来日中国僧らによってその文化は日本にもたらされた。博多こそは文化の最先端都市だったのである。

五、日明の時代

十五世紀〜十七世紀初の日明貿易の時代は日中文化交流の歴史上、一つの大きなピークであった。医学においても例外ではない。明代に対応する室町〜安土桃山時代、日本はきわめて旺盛な意欲をもって明の医学文化を吸収した。江戸元禄時代に入ると、清の医書の影響は希薄になり、日本の医学は独自化の道を歩むことになるが、これは江戸初期までの明の医学文化受容の基盤があってこそ生じた現象である。すなわち近世日本漢方の礎は日明関係の時代に培われたといえるであろう。

明は一三六八年に建国した。太祖洪武帝は当時大宰府を掌握していた南朝の懐良親王を日本国王とみて外交を求めたが、南朝の劣勢を知って、博多の多々良浜で肥後菊池氏を破り東上して室町幕府を開いた足利尊氏の孫義満とも通じた。義満は明徳三年（一三九二）に南北朝を統一して幕府体制を固めたが、渡明経験によって貿易の利を悟った博多商人肥富の進言を容れ、応永八年（一四〇一）肥富を副使とした遣明船を派遣。ここに明との正式交易（朝貢貿易・勘合貿易）が始まり、天文十六年（一五四七・策彦周良）まで都合一九回に及んだ。遣明船の主船は兵庫を発し、瀬戸内海を西下して博多湾に入り、博多で船団を組み、五島において順風を得て東シナ海を横断、寧波の港に着航した。かくなる経緯で日明貿易の前半期は推移した。ところが、室町政権が弱体化した十五世紀後半以降、西国に勢力を張り博多商人と結んだ大内氏と、有力大名で堺商人と結託した細川氏との間に対明貿易における利権争いが激烈化し、ついに大永三年（一五二三）中国人を巻き込んだ寧波の乱が勃発した。これを期に遣明貿易は厳しい制限が加えられ、以後二回の遣明船は大内氏が独占した。大内文化の繁栄にはこのような背景がある。こうした情況下で日明貿易の実体は密貿易へと移行し、日明関

係の後半は中国海商を主体としたいわゆる大倭寇時代へ入ったのである。薬材・書籍を含む密貿易品は日本の大きな需要を得て中国海商に莫大な利益をもたらし、日本からは大量の銀が流出した。

室町時代前期の最先端医学は、明に留学し帰朝した医師たちによってリードされた。その先駆けをなしたのは竹田昌慶である。昌慶は太政大臣藤原公経の子で僧籍に入り、明建国直後の応安二年（一三六九）渡明し、金翁なる道士について医を学び、その娘を妻とし二子を儲けた。洪武帝の后の難産治療に効あって安国公に封ぜられたという。永和四年（一三七八）多量の医薬書や銅人形を携え帰朝。足利義満に仕え、法印に昇進し、医の名家・竹田家の祖となった。江戸末期に江戸医学館で覆刻計画が進められた宋版『外台秘要方』は昌慶の将来品である。

僧医・月湖は通説によると、十五世紀半ばに渡明して銭塘で医名を博し、景泰三年（一四五二）に『全九集』を著して当地で版行され、三年後に『済陰方』を著したという。田代三喜は入明してこの月湖に李朱医学を学び、帰国して日本にはじめて金元医学を伝え、曲直瀬道三がこれを継承したとされる。

坂浄運は南北朝時代からの医の名家に生まれ、明応年間（一四九三年の第十五回遣明船か）渡明。帰国後『続添鴻宝秘要抄』（一五〇八）を著し、足利義政・後柏原天皇の侍医となった。子孫は吉田盛方院家として江戸時代活躍した。

半井明親は宮廷医和気氏の系で、永正年間（一五〇六年の第十六回遣明船か）に渡明し、熊宗立（時代にずれがある）について医を修め帰国。在明中、武宗の病を治して驢馬を下賜されたと伝える。よって驢庵と号し、後裔は歴代驢庵を襲称し、江戸時代を通じ官医として最高の家格を保った。

足利義晴の侍医・吉田宗桂（意庵）は天文七年（一五三八）の第十八回遣明船で渡航し、三年後帰国。同十六年（一五四七）の第十九回遣明船にも前回同行した策彦周良とともに再入明し、三年後帰国した。第十九回遣明船は策彦を正使とし、最終回となった遣明船で、このときは四隻に六三七人が乗船した。明都北京への上京が許されたのは五〇人で、宗桂もそのなかにあって世宗に拝謁し、世宗の病の治療を求められ効を奏したことから『聖済総録』二百巻や数々の宝物

を賜り、中国に鳴ったという。長男は豪商角倉了以、次男は名医吉田宗恂であり、以後子孫は大いに栄えた。

以上のごとく、渡明した医師達はいずれも中国で名声を博したと伝え、皇帝・皇后の療治に卓効を奏して帰国した医家はこぞって法印の位に就き、家系は累世最高格の医家となった。これら名声話はあくまで日本側の資料に拠るもので信憑性は期しがたい。要するに中国は最先端医学の国であり、最高位の医師としての立場を確保するには、中国の権威が何よりも役立ち、また必要だったのである。

明の医学はおおむね宋金元医学を引き継ぎ、拡充したものといえる。金元時代（一一一五～一三六七）には革新的な医学理論の展開運動があった。略言すれば古典理論の統合――内経理論（陰陽五行・運気学説）をもって生理・病理・薬理を整理し、薬物学・処方学の治療体系を再構築しようとする試みであり、結果としては伝統医学に新たな方向性を開くこととなった。その代表的主導者に、劉完素・張子和・李東垣・朱丹溪ら後世、金元四大家と称される医家がいる。各家はそれぞれに学派をなしたが、前二者を劉張医学、後二者を李朱医学と総称することもある。明代にはこの金元の新機軸を基本とし、その後の経験・研究を加味した医薬書が数多く世に出た。劉純・熊宗立・王璽・虞摶・薛己・李梴・呉崑・龔廷賢・馬玄台・張介賓・李時珍といった人々による著作が影響力を持った。

入明医家をはじめとする当時の知識階級の医師達は、最新の明医学を競って導入し、門派・交流社会内での普及につとめた。その機運の高まりのなかで、大永八年（一五二八）日本で医学書が初めて印刷出版された。刊行者は新興都市堺の豪商で医を兼ねた阿佐井野宗瑞、対象となった書は熊宗立の『医書大全』である。さきにも説いたように、文化的影響力において書物の出版はきわめて大きな意味を持つ。写本に比して、同じものが同時に複数作れるという点、数百倍の情報伝達力を有するからである。中国の医書印刷に遅れることと五百年にして、ようやく日本でも医書印刷文化の萌芽をみたのであった。『医書大全』の原本は正統十一年（一四四六）福建の建陽で初刊され、成化三年（一四六七）に重刊された。出版者は編著者自身の熊宗立である。宗立は儒にして医を兼ね、出版事業家でもあった。自己の著述を含む多

種の医書・儒書を刊行し、子孫の熊氏一族も福建における屈指の出版家として活躍した。十五～十六世紀の日本医学に影響を与えた最大の中国医家である。福建は日明貿易の一大拠点であり、日本に対する文化的影響は強かった。文化は高いところから低いところへと流れる。熊宗立の所業も当の中国よりはむしろ日本の医学に色濃く反映されることとなった。医・儒・出版事業を兼ねた職業形態までもが阿佐井野宗瑞の手本とするところとなり、ひいては吉田宗恂や曲直瀬玄朔らの主導する活字医書出版活動へとつながっていったのである。

上記の動きと連携する五山僧の学術活動も見逃すことはできない。来朝僧や留学僧を中心に鎌倉時代から育まれてきた五山文学はこの頃爛熟の域に達し、その学問は多領域にわたり、医学知識に精通する者もいた。月舟寿桂や谷野一栢などである。月舟は前述の大永版『医書大全』に跋を書いた高僧で、医書には造詣が深く、その深遠さは『史記』扁鵲倉公伝の標注に現われている。そこに引用された新渡来医書の多くには熊宗立刊行物が用いられており、ここにも熊宗立の影響を見取ることができる。月舟は竹田昌慶の子孫たちや、坂氏や、陳外郎の名で知られる帰化中国人の子孫、陳有年や周晦らの有力医師と太い絆を持っていた。陳氏の祖の宗敬は、元の滅亡に伴い日本に逃れた官僚（礼部員外郎）また医官（太医院）であった。その子大年は遣明船で渡海している。越前朝倉氏の一乗谷に住した一栢も月舟と親交を持ち、医学暦学に通じた。一栢は朝倉氏の援助を得て天文五年（一五三六）第二の日本印刷医書『勿聴子俗解八十一難経』を一乗谷の地で開版した。同書もまた熊宗立の注解かつ刊行になる書であった。ちなみに近年一乗谷遺跡から医書の焼片が出土したが、これも熊宗立の刊行した『東垣十書』に由来することが明らかにされている。

曲直瀬道三は当時の中国医学（明嘉靖間に行われた医学）を日本に導入し、根づかせた功労者である。学舎啓迪院を京都に創建して医学教育活動に従事するとともに、時の権力者、足利義輝・毛利元就・織田信長・豊臣秀吉らの信任を次々と得、その医療を担当するかたわら処世の相談役ともなり、千利休などとも親交を結んだ当代一流の文化人であった。代表作『啓迪集』八巻（一五七四）は当時の中国医学の要をまとめたもので、巻頭に最終遣明船の正使をつとめた高僧・

策彦周良の題辞がある。本書は一般に李朱医学の書といわれるが、それは間接的にであって、実は嘉靖までの明(一三六八〜一五六七)医学の集約というほうが正しかろう。医学は実用学であり、いつの時代も先端情報の導入が望まれる。『啓迪集』には当時最新の嘉靖版医書の使用が多く認められる。策彦らから遣明の際得た医書の提供を受けたのであろう。田代三喜が明より李朱医学を持帰り、道三がこれを承け広めたというのが通説であるが、三喜の医学と道三の医学とは異なる。道三は三喜の目睹しえなかった中国新刊医書を広く求め研究し、自己の医学を確立したのである。日明貿易なしに道三の医学はとうてい考えられない。

安土桃山時代から江戸時代に移るとともに、医学の世界は道三からその養嗣子玄朔の時代へと移った。道三の活躍した時代と玄朔のそれとは、今日の医史学上の通念ではほぼ同類のものと見なされがちである。しかし、ちょうど一六〇〇年頃を境に(つまり十六世紀と十七世紀とでは)医学文化の様相は一変すると私は考えている。それは、活字印刷技術の伝来と普及、そして『医学入門』『万病回春』『本草綱目』といった嘉靖にかわる万暦新刊医書の渡来、さらには学問の担い手が禅僧から儒者へと移行したことなど、いくつもの歴史的条件がしからしめた変化といえる。

日本を統一した豊臣秀吉は明の征服を企て、朝鮮に出兵した。文禄・慶長の役(一五九二〜九八)である。近世博多の基礎となった大閤町割りは朝鮮出兵をもくろんでなされたものという。博多は軍事都市となり、さらに肥前に先端軍事基地・名護屋城(東松浦郡鎮西町)が築かれた。文禄の役では曲直瀬玄朔も毛利輝元の療治のためこの地を通って朝鮮に渡り(一五九二)、翌年帰国している。六年にわたる朝鮮侵略は悲惨な状況を生み出したが、一方で侵略側の日本は略奪した李朝文化の恩恵にも浴した。医学では大量の朝鮮版医書の将来とそれにともなう活字印刷技術の導入である。

朝鮮は活字印刷技術がずば抜けた発達を遂げていた。従来の整版印刷(木版一枚刷)に比べると活字印刷(一字ごとの組版)ははなはだ軽便であり、たちまちわが国では活字印刷が盛行するようになった。それ以前は中国医書は輸入書とその写本に頼るしかなかった。当時の舶来書は極貴重品で、特殊な立場でなければ手にすることはできない。また十六世

紀前半にわが国で整版医書の印刷が開始されたとはいえ、手間・費用に対して需給の関係が成り立たず、従来わずか三点の医書が印刷化されたに過ぎなかった。適正価格の和刻本医書の需要が頂点に達していたところへ、折しもこの技術が入ったのである。最近、古活字印刷の技法は、西洋きりしたん版の継承とみるむきもあるが、医書から見る限り、朝鮮活字版技法の強い影響を認めないわけにはいかない。いずれにせよ筑前・肥前は国際文化受容の最前線であった。

古活字出版の対象は広い分野に及んだが、その振興に学のみならず財・政に力を伸ばしていた医師が深く関与していたため、古活字版中で医書の占める割合は格段に高かった。慶長～寛永間にわたって続いた古活字版医書の版種は二百を下るまい。しかもその大半は中国新刊書による翻印であった。この活版印刷が中国医学文化の受容に果たした役割はきわめて大きく、江戸時代の日本医学を醸成する母体ともなったのである。

寛永末年（一六四四）中国では明朝が亡び、満州族清朝の支配となった。その前後、明末清初の戦乱を避け、あるいは清朝への服従を拒否して明の遺民が次々と日本に亡命した。そのうちには、王鞾南・王寧宇・馬栄宇・独立性易・陳明徳・何欽吉といった江戸の日本医学に少なからぬ影響を遺した人々もいた。

明の完全滅亡に先立つ寛永十六年（一六三九）徳川家光はいわゆる鎖国政策を確立。オランダ・清国・朝鮮を除く外国との通交を断ち、貿易港は長崎一港に限った。博多は長きにわたった対外第一の窓の座を長崎に譲る。

すでに紙面は尽きた。以後の歴史は奥村武氏の特別講演Ⅰにおいて私自身学びたいと思う。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医史学研究部）